

三鷹まちづくり総合研究所「サステナブル都市三鷹研究会」

第1回議事録要旨

日時 平成23年6月16日(木)午後6時～午後8時

会場 三鷹ネットワーク大学

出席者 濱野周泰(座長)、矢内秋生(副座長)、朝倉薫、斉藤伸也、市川嘉一、一條義治、石坂和也、岩崎好高

事務局 三鷹市環境政策課 三鷹ネットワーク大学

【議事録要旨】

(注)この議事録は抄録であり、すべての発言が掲載されているものではありません。

1 研究所所長あいさつ—清原慶子市長

まちづくり研究所は1989年に、三鷹市内にある国際基督教大学に、三鷹市が委託する形で、共同で始まったものであるが、私は、その最初の研究会の研究員であり、その特徴は、研究者の皆さんと職員が、全く同じテーブルについて、対等のパートナーとして、議論をして研究をするというスタイルであった。

5年前に、この三鷹ネットワーク大学推進機構に委託をして三鷹ネットワーク大学のネットワークをまさに広げる中で、まちづくりについての総合的な研究を行いたいということで、改めて総合研究所としてスタートし、市長が所長に就任した。

さて、今日から始まる「サステナブル都市三鷹研究会」というのは、1つには持続可能性ということ、とりわけ、環境に関わる政策というのが意味を持つてくる。併せて、持続可能性を考えたときに、昨年度から、私自身がメインのテーマに掲げている都市再生ということも重要であり、環境の維持ということも重要で、更には、財政力なくしてサステナビリティは達成できないことから、財政の観点も必要になってくる。

私の責任は、三鷹市のサステナビリティを保つことでもあり、市民代表として、市民の皆様の暮らしの環境を持続可能にしていくこと、そして、組織である三鷹市の代表として、三鷹市の組織が持続可能なものとなること。これが両方、結果的には、市民の皆様のために役立つことであると思う。

是非、何よりも自由闊達に、オブザーバーの方も含めて、遠慮なく発言をしていただき、実りある成果を期待している。

2 研究員自己紹介(略)

3 座長あいさつ—濱野座長

サステナブルというキーワードは、いろいろなところで使われている。持続性を担保するには、私は生き物を扱っているので、生物の中に無用な生物はいない。現在を支えるのに、私た

ちとの距離の間に、本当に直接害を及ぼすものも、あるところでは、私たちの生活に寄与しているはずである。

何か生活の中に無駄だと思われるものも、実は、僅かではあっても、私たちの生活を支えているということだろうと思っている。

是非、発言を多くしてこの成果を期待したい。

4 講演「サステナブル都市とは」

日本経済新聞社編集局産業地域研究所 主任研究員 市川嘉一氏

サステナブル都市とはどういうものかという基本的な話と、どういう指標が、これまで特に、先行してヨーロッパで行われていたのかという話、サステナブルシティの先進事例で、欧米、日本の事例の話をして、そこから得た知見として、目指すべきサステナブルシティのイメージ、それに対して、三鷹市の取組み事例をどう見るかという話をしたい。

サステナビリティという言葉の意味は、限られた資源は有効に、将来に大きな負荷をかけないで、将来のニーズを満たすということである。

そういったものが、国とか社会レベルで使うようになってきたのは、1992年のブラジルのリオ・サミットであり、そこで初めて、温暖化問題ということが世界のレベルで話し合われた。

その5、6年前にノルウェーの首相だったブルントラントという女性が、国連の環境開発委員会の委員長をやっている、そこで初めてサステナビリティという言葉が、国レベルで使うようになった。

その意味としては、将来に大きな負荷をかけないで、現役世代のニーズを満たすのだと、そういう意味で使った。それが1992年の温暖化サミットで採択された。

一方で、この都市という文脈で、このサステナビリティが使われてきたのは、1990年代前半以降だといわれていて、もともとは欧州、ヨーロッパで土壌汚染とかそういう環境問題の深刻化を背景に、国レベルというよりは、直接、都市で、都市の役割に注目しようというのが始まりだった。

そして、サステナブルな都市ということが、だんだん議論されるようになってきた。EUの行政局に当たるEC、欧州委員会の方で、いろんな関係者を集めて、サステナブルシティの検討が始まった。

最終的に1996年に、サステナブル都市の報告書というものがつくられ、日本の官庁でいうと環境省にあたる、EUの環境政策総局が、その報告書をつくった。そこで初めて、欧州の行政レベルの公的な概念として「経済・社会・文化を統合した包括的な都市政策」というものを打ち出した。

その後、EUと一緒に連携している有名なNGOで、ICLEIというのがあり、そこが、サステナブル都市というものを「地域の経済発展、環境保全、社会」、この社会というのは、特にEUで社会と言った場合には、公正と平等、つまり、ジャスティスと平等。その3つの側面がバランスの取れた都市を、サステナブルシティだと。現在も、このICLEIの定義が一般化している。—中略—

海外でも青春時代で有名なオスロとか、ドイツのハイデルベルグなんていうのは、欧州のサステナブル都市賞というものを受賞した団体で、こういう EU とか EU の関係団体が、プライズを与えることによって、自治体に意識を促すということをやってきた。

欧州共通指標とともに、ヨーロッパでけっこう有名な指標としては、オールボー憲章に基づいた指標が、オールボー・コミットメントというのがある。それも約 10 の分野からなっている。（デンマークの小さな町のオールボーに、ヨーロッパを中心に世界中の、環境の自治体とか関係者が集まって、そこで、先ほど言ったトリプルボトムラインのサステナビリティの実現を目指そうと、そういう憲章を 1994 年に策定し、調印した。現在は 2500 都市以上の自治体が署名したと言われている。）—中略—

サステナブル都市というのは、先ほど、トリプルボトムラインという話をしたけれども、とりわけやはり、経済と環境のバランスある発展というところが、ポイントだと思う。—中略—

オスロというのは、北欧の基本的に寒い国の都市で、自然だとか環境保全をしようという意識が高い市である。そして、行政計画で、持続可能な発展戦略というものを打ち出している。—中略—

ドイツのハイデルベルグの事例では、環境というものを幅広くとらえていて、都市発展計画が、上位の計画となっている。ローカル・アジェンダと言う。意識すると、都市発展計画は、広い意味の環境都市計画、サステナブル都市計画で、その中に基づいて小さい、狭い意味での環境が入ってくる、というふうに構成されている。—中略—

豊田市も、トヨタ自動車の企業城下町として、ちゃんとしっかりと財政を生かして環境行政を一生懸命頑張っている。公共交通だけではなくて、森林保全、独自の補助金で森林の伐採、団地化を推進する。中小企業の CO2 削減で、コンサル派遣による省エネ診断とか、そういう支援に力を入れている。電気自動車というところにも注力していて、市民の購入に対しても、手厚く支援をしている。

北九州市でも、元々ここは、公害の町から出発して、環境の意識が高いと言われていて、また新しく、低炭素都市ということで、ここ数年、力が入っており、商店街に太陽光発電ルーフを付けるとか、あるいは、グリーンビレッジとあって、スマートグリッドという、次世代送電網を軸にした新エネルギーを、団地でつくろうという計画がある。

ヨーロッパの中で、交通政策というのはかなり中核、中軸だということを説明したが、まさにその環境の中軸として、交通政策に力を入れている都市として、日本では、富山市がかなり有名になっている。—中略—

21 世紀、もう 10 年経って、こういう 3 月 11 日以降、世の中も大きく転換した、大きな潮目があってきましたけれども、そういう中で、東京の住宅都市である三鷹市は、これまでどおりでいいのか、もう少し長期のスパンで、こういったものも考えるべきなのかというところは、議論してもいいような感じもしている。要は、サステナビリティというのは、環境を起点にした取組みであり、それも、統合的な取組みである。

バラバラな取組みをしないで、あくまでも、環境保全、環境創出を目標にした、都市戦略をつくる。その中で、割合、重要なものとして、交通とかいうものがある。

当然、そのためには、強力なリーダーシップとかメリハリのある税金収入が必要で、更に、それに連携した市民参加、市民の取組みというものも、当然、必要になってくる。

—中略—

○濱野座長 次に、三鷹市の取組みの方の御紹介をお願いしたい。

○岩崎研究員 三鷹市の取組みは、高環境のまちづくりと協働という形で、三鷹市の基本計画、あるいは個別計画である、環境基本計画等々に基づく取組みとして、皆さんに御紹介をする。

「みたか環境活動推進会議」の環境フェスタ 2010 や環境フォーラム 2011 の事業紹介。

エコカーや電気自動車の試乗会、団体発表、エコミュージカルなど。

環境基金を活用した事業の紹介。環境標語表彰や環境ポスター表彰など。

スーパーエコ庁舎推進事業の紹介。本庁舎のガラスを交換、中庭芝生化、太陽光パネル設置、第二庁舎の LED 照明、高効率照明、複層ガラス化など。

環境マネジメントシステムでは、ISO14001 や簡易版、あるいは学校版の独自のシステムなど。

さらに、ESCO 事業を実施例について紹介。本庁舎、牟礼コミュニティセンター、環境センター、芸術文化センター、東部下水処理場で実施。—中略—

サイクル&バスライドや自転車道の整備を紹介。

最後に、サステナブル都市の実現には、協働、目的、目標、ビジョン、あるいはお互いのメリットを導き出すような手法とか、無理のない持続可能な方法、目に見える効果・数値化できる効果というものが、必要ではないかなと考えている。

○濱野座長 ありがとうございます。次に齊藤オブザーバーからの報告を。

○齊藤オブザーバー

「サステナブル都市の設計手法」と「エコライフスクエア三島きよづみ」について説明。

エコライフスクエアは三島の駅から5分のところで、22戸の住宅で、8社の住宅メーカーが2、3戸ぐらいつづ建てていて、全部の家に3キロワットの太陽光が乗っていて、エネファームもついていて、売電もしている。

1か月単位で、どれぐらい電力を使ったか、系統からどれぐらい取ってきたか、エネファームで発電したのはどれぐらいなのか、使ったのは、というようなレポートを、月に1回、手でもって、こちらが回って、それで情報収集されている。

もう一つの資料の方が、余り、サステナブルの全体的な話というよりも、今回、エネルギーというところで、私どもやっているの、そこだけというところだが、自然エネルギーの再生、導入、設計というようなのを、やられている事例があったので、これも御紹介しようかなと思って持ってきた。

「サステナブル都市の構築サイクル」これは、スマートコミュニティの構築についての資料。

実際に、長期に渡って運営していこうと思えば、ちゃんと経済合理性を考えなければいけない。モデリング&シミュレーションという手法が必要になる。

○濱野座長 ありがとうございます。

○一條研究員 三鷹市の場合、確かに今まで、全国にくらべれば比較的高い財政力で、それに基づいた環境政策をやってきて、ランキング調査などいい位置につけたが、果たしてこれが、本当にこれから続けられるのかという危機感と心配感を持っている。

今後、団塊世代が退職されて、2025年には、非常に高齢化を、三鷹市の場合、迎える。その財政力が、恐らく個人住民税が落ちていく一方で、高齢者福祉はどんどん増えていって、非常に財政の硬直化が予想されているが、三鷹市が、サステナブル都市として持続していくために、どのような観点やポイントをもって、政策の研究をしていけばいいかということ、市川先生から教えていただきたい。

○市川ゲストスピーカー 少し、半分、思いつきですけども、今日話した環境を起点にした新しい都市経済システムという話をしたけれど、まさにそこだと思う。

三鷹市は、東京の郊外都市、住宅都市だが、やはり新しい環境を起点にした産業の、既にそういう産業もあるが、産業をつくる、また雇用の場をつくることによって、また新しい人口を増やしていく。

やはり、人口というのは大事になるもので、そのために、環境を起点にした産業・企業誘致、雇用の場を創出するというのは、1つあると思う。それが、新しくまた財源をつくっていく。ただ、あと、人口が減って、財源が厳しい中で、どうしていくかということ、またそういう、オスロとかヨーロッパの話をしたけれど、住民ではなくて、観光客だとか、そういう交流人口ですか、そういうところに呼び集めるということも、これからまた、三鷹市の道だと思う。既に、ジブリだとかそういったものは、まさに、そういう路線だと思う。

○濱野座長 ありがとうございます。

○岩崎研究員 第2回は環境フォーラム2011に参加することとしたい。

さらに、第3回では、各研究員、オブザーバーからサステナブル都市についてそれぞれ発表いただきたい。

○濱野座長 了解した。

以上